

1 & 2◆タイトル、サブタイトル:

はじめて学ぶ先生に贈る 特別支援を**科学**する本

3◆キャッチコピー:

- 頭がいいのに空気が読めないのはなぜか
- “こまった子”は困っている

4◆企画概要:

毎年 2 人から 3 人、25 年間で 65 人。これは、40 人学級の担任をしていて出会う、“授業を聞いてもらえない子”・“授業を聞いているのにテストができない子”の最低人数です。この子たちの背景には「能力の偏り」があり、通常の指導ではうまく教えられません。彼ら、彼女らをしっかり成長させたいと思うなら、熱意だけでなく、「通常学級における特別支援の基礎知識を科学的・体系的に理解」することが求められます。

もし、授業になると席を立って歩き回り、時には教室を飛び出してしまう子どもがいたら……。 「注意しよう」と思いませんか？でも、通常学級における特別支援の基礎知識を科学的・体系的に理解している先生は、注意するほど立ち歩くかもしれないことを知っています。

本書では、こんな思考ができるように、「通常学級における特別支援の基礎知識を科学的・体系的に理解すること」を目指します。ただ、これを初学者がきちんと習得するのは意外と厄介です。それは、心理学的なモデルや統計データなど、理系の学問に明るい人や研究者が得意とするような、難解な情報と向き合わなければならないからです。本書は、必須の科学的モデル・データを厳選し、分かりやすいテキストを添えてお届けすることで、初めて学ぶ読者の理解を全力で支えます。現在は医学部に通う「理系」でありながら「文系」学部で教員の卵とともに 4 年間で学んだ、私だからこそできることと思っています。

5◆企画者名:

久保卓也

6◆企画者プロフィール:

○専門知識・特別支援の経験ともに充分!

私は富山大学人間発達科学部で、2 年間特別支援教育（心理・言語・生理）を学ぶ研究室に所属し、学会発表（第 17 回認知神経心理学研究会：CCC2 の妥当性の検証と共分散構造分析によるコミュニケーションモデルの構築）を経験しました。

第12回出版甲子園

また、学習面の問題がある子どもを支援する「寺子屋」・「教育相談」、行動面の問題がある子どもを支援する「ゆうの会」で、計200時間を超える臨床支援（困っている子どもの支援）を行ってきました。実際に小学校教諭1種免許状を含む教員免許6枚と、心理学検定特1級を所持しています。大学生ではありますが、経験は現職の教員に引けをとらないと考えています。

○初学者の疑問や悩みに触れた豊富な経験

私は現在岡山大学医学部に所属しています。1去年は指導教官の助手として、富山大学附属病院の小児科に通いました。そこでは、子どもと担任の先生と一緒に来院されることも多く、学校の先生への助言も行われていました。また、教員や保護者から、私が個人的に支援方法のアドバイスを求められたこともあり、これに応えた経験もあります。そのため、子どもの専門的な指導法だけでなく、学校教員がどのような悩みを持つのか（例えば、通常学級ばかり経験してきた先生なら、「どこに原因があるのかわからない。」「どう支援していいのかわからない。」）、これを解決するにはどうすればいいのかを学ぶことができました。

○執筆経験があります！

現在編集作業が進行中の高等教育学に関する書籍、「学生と育つ大学教育（仮）：ナカニシヤ出版」において、分担執筆で1章を頂くこととなっているため、鋭意執筆中です。

7◆読者ターゲット:

・メインターゲット

通常学級の教員。とくに、自分のクラスにいる“授業を聞いてもらえない子”・“授業を聞いているのにテストができない子”彼ら彼女らにどう対応したらいいか、どう支援したらいいか、日夜悩んでいる熱心な先生。

・サブターゲット

スクールカウンセラー（臨床心理士）、スクールソーシャルワーカー、特別支援コーディネーター。

8◆企画のねらい:

本書は、教員が特別支援を学ぶ最初の1冊として、“科学的・体系的な支援の理解”の実現を目標としています。これが子どもと向き合ったときの“指導の土台”となります。

また、今後さらに高いレベルで学ぼうと思ったときのための“学びの土台”としても活躍する1冊を目指しています。基礎の基礎を提供することで、子どもしっかりと育てられる、充実した教員生活をお助けできたらと思っています。

9◆企画の背景:

さきほど述べたように、文部科学省が2012年に実施した調査の結果、通常学級で特別な支援を必要とする児童生徒は約6.5%に上るとされています。また、2015年9月に「公認心理師法」が成立し、発達障害の子どもに対する支援に関するトレーニングも受けた国家資格としての心理師の養成が始まろう

第12回出版甲子園

としています。このように、特別支援の重要性が認められ、その整備が急速に進められています。

しかし難解な書籍や論文が多いため、特別支援教育は初学者にとって学びにくい領域です。そこで「特別支援を初めて学ぶ人でも、分かりやすく学べる本」を作ろうと考えました。

10◆類書との差別化:

○ゼロから学べる特別支援教育 —若い教師のための気になる子への支援入門—

→分かりやすく、簡潔にまとめられている。しかし、「なぜそう指導すべきなのか」の部分の記述は乏しく、超初心者向きといった内容。

○特別支援教育の理論と実践

→初学者にとっては非常に難易度が高い。3分冊であるため通読も大変。つまみ読みも難しい。

このように、通常学級における特別支援関連の書籍は

①事例を中心に扱った書籍

②科学的な研究について書いた専門的な本

本企画では、事例からエッセンスを抽出するにも、科学的な研究にアクセスするにも、目の前の子ども支援の一步を踏み出すにも必要な土台を、分かりやすくお届けします。

11◆企画者の要望:

科学的な根拠を示すために、または、支援を考えるためのモデルを提供するために、筆者が作成するチャートやグラフを豊富に盛り込む予定です。

配置される棚としては、教育関連書籍のコーナーを想定しています。

また、富山大学人間発達科学部の小林教授、宮教授に出版時の監修のお引き受けいただけることになっています。

12◆構成案:

序章 はじめに

Step.1 困っている子を「科学的に」理解しよう

第1章 「支援が必要な子ども」とはどんな子か? —さまざまな障害と困難について

第2章 「授業を聞いていられない」! 「行動面」に問題がある子

第3章 「授業が分からない」のはどうして? 「学習面」に問題がある子

[コラム①] 「学校に来られない」—「支援がない」ことが引き起こす深刻な「二次障害」

Step1では、まず『特別支援が必要な子ども』とはどのような子なのかを理解します。

第1章では、「困り感」を生む障害、2~3章では、その背景を説明します。

子どもたちの問題を「行動面:落ち着きがない等」と「学習面:学習の遅れがある等」に分けて、「困り感」発生メカニズムを心理学モデルを用いて明らかにしていきます。

Step.2 困っている子を支援したい！ —「課題」への対処と支援の実践—

第4章 「できたね！」と褒められる子どもに —「行動面」の問題に対処する

第5章 「わかる」をめざして —「学習面」の問題に対処する

[コラム②] 「学校に来られない」子どもたちへのアプローチ

Step2では、Step1で明らかにした「課題」に対処し、困っている子が「課題」解決に必要な力を伸ばしていくための支援の方法を理解します。具体的には、

- ・その子の「課題」の枠組みを組み変えること
- ・「課題」をこなすために必要な能力を再構築する手法

を考えることで、子どもの「困った」を軽減、解消する方法を紹介します。

Step.3 支援の技術を活かすには

第6章 さまざまな視点から —子どもを多角的にとらえる工夫

第7章 支援をするのは担任だけではない —他の教員、他職種と協力する

第8章 今の支援はいい支援？ —指導の効果を確認する方法

ここでは、今までに紹介した「目の前の子どもの、目の前の問題を解決するスキル」を活かす方法を学びます。様々な角度から多角的に子どもをみて、支援を考えられるようになる。医師や心理師など他職種と協力して支援を進められるようになる。そして、自分たちが行っている支援が、本当に効果があるかを確認できるようになる。以上の3つが目標です。

Step.4 「ふつう」の子どもと特別支援 —通常学級で支援するという事

いわゆる「ふつう」の子どもの視点に立つと、「通常学級に特別支援教育を取り入れること」への賛否は分かれます。最後に両者の視点と、これからの『「ふつう」の子どもと特別支援教育』のあるべき関係性について紹介します。

終章 おわりに

13◆見本原稿:

(Step.1 第2章より抜粋)

ケース①

児童のA君はしょっちゅう、授業中にいきなり叫んでさわいだり、席を立て歩いたり、時には教室から出て行ってしまいます。

強い口調で「Aくん、席に戻って!」「一緒に勉強しよう!」と呼びかけても、彼は先生の指示を聞きません。それどころかエスカレートして、より大きな声を出す場合さえあります。A君は先生に反抗しているのでしょうか?

このような場合、教員はどうするでしょうか。

多くの先生が、「もっと強い口調で注意する」「何度も繰り返し叱責する」という対応をしてしまいがちです。しかし、じつはこの「注意」こそが、Aくんが騒いでしまう原因になっている可能性があるのです。

そのことを理解するために、「行動分析学」の考え方をを使って、A君を見ていきましょう。
最初に、以下のことを踏まえておいてください。

POINT～行動分析学の原則～

人は、「行動する前」より、「行動した後」に“よい状態”が得られる場合に行動し、
“よい状態”が得られない場合には行動しない。

上記の原則を分かりやすく場合分けしてみましょう。

まず、人の行動は下の図のような過程で表すことができます。



そして、「行動前の状態」が「いい状態」だったか「いやな状態」だったか、行動した結果「いいことが起こった」か「わるいことが起こった」かで、人の行動は以下の4つのパターンに分けることができます。

- ①行動することで「いい状態」生じるパターン：好子出現
(ex.宿題をする→先生にほめられる)
- ②行動することで「いやな状態」がなくなるパターン：嫌子消失
(ex.夏場にクーラーのスイッチを入れる→暑さがなくなる)
- ③行動することで「いやな状態」が生じるパターン：嫌子出現
(ex.教室でやんちゃをする→先生に怒られる)
- ④行動することで「いい状態」がなくなるパターン：好子消失
(ex.冬場にヒーターのスイッチを切る→寒くなる)

<Word>

好子：その人にとってよい状態を作るもと、

嫌子：その人にとって悪い状態を作るもと

そして、パターンごとに「行動が起きる」か「行動が起きないか」が決まっています。

- ①好子出現→行動が起きる : 強化 (教育心理学では、正の強化という場合が多い)
- ②嫌子消失→行動が起きる : 強化 (教育心理学では、負の強化という場合が多い)
- ③嫌子出現→行動が起きない : 弱化 (教育心理学では、正の罰という場合が多い)
- ④好子消失→行動が起きない : 弱化 (教育心理学では、負の罰という場合が多い)

<Word>

強化 : 行動が生じること

弱化 : 行動が生じなくなる事

では、Aくんの例に戻ってみましょう。

まず、上記のように考えると、「注意したら注意するほど問題行動がエスカレートする子ども」という現象はおかしいと感じませんでしたか？この現象は、③に該当するはずだから、問題行動はなくなると考えてしまうかもしれません。しかし、「行動分析学」においては、これとは異なった順番で考えます。

みなさんはおそらく、こう考えたことでしょう。

- (1) 注意されることは嫌子 (いやなこと) に違いない
 - (2) ならば、問題行動が発生するたびに、嫌子 (いやなこと) が発生している。
 - (3) となれば、③の嫌子出現による弱化 (行動の減少) に違いない
- ……はて、おかしいぞ？ 行動が増加している？

しかし行動分析学では、その名の通り行動から考察をスタートします。

- (1) なにはともあれ行動が増えたのだから、①の好子出現による強化か②の嫌子消失による強化のはずだ。
- (2) その子の行動の前後に変化したのは、「注意」の有無だけだ
- (3) ということは、「注意」が好子として働いたことで、①の好子出現による強化が生じたと考えべきだ。

つまり、「注意したら注意するほど問題行動がエスカレートする子ども」にとっては、「注意」がご褒美として作用してしまっているのです。例えば、先生に注目してほしいから、わざとやんちゃをするようなケースがこれに当たります。その子にとっては、注意されることが先生に注目されるという好子になっているのです。これでは、注意するほど問題行動はエスカレートするばかりですよね。残念ながら、Aくんは「先生に反発している」わけではなかったのです。

(Step.2 第4章より)

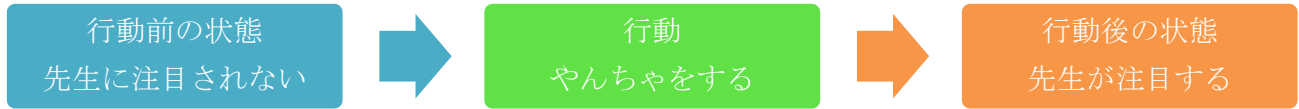
Step.1の2章で、授業中に騒いでしまうA君の例を参考に考えを進めました。

では実際、あのケースにはどう対応したらいいのか。いくつか方法がありますが、ここではまず、バイパスの形成という手法で解決を試みましょう。

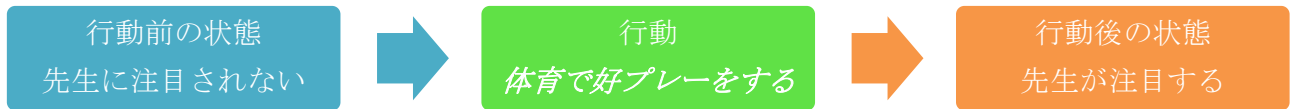
POINT～バイパスの形成～

「行動した後」に同じような結果が得られる、別の行動を探す

今回取り上げたケースは、以下のようなパラダイムとなります。



これを、例えばこのように操作すればいいのです。



例に挙げたようにやんちゃをしなくても、例えば体育の授業で好プレーを見せることができれば、その子はみんなから注目し、認めてもらうことができます。ここで得られる注目は、やんちゃをしたときの注目よりも大きな好子（いいこと）となる可能性が高いでしょう。そうすると、問題行動は徐々になくなっていくと考えられます。このとき先生に求められるのは、

- （1）その子がみんなに注目してほしい、認めてほしいをやんちゃをしていることを理解してあげること<行動のパラダイムを理解すること>
- （2）その子のよさを見つけて、適切な行動（ここでは体育での好プレー）で同じ結果が得られるような環境を作ってあげること<行動のパラダイムの組み換え準備>
- （3）その子の良さが表れた瞬間、褒めるという大きな好子を沢山あげること<行動のパラダイムの組み換え実行>です。

今紹介した方法は、行動の前後の状態をそのままに保って、行動を適切なものに変えるため、「バイパスの形成」と呼ばれます。

さて、上記は筆者が考えるに、教育現場では最も効果的な解決策です。ただし、こんなに悠長なことをいってられない場合のために、そして、行動のパラダイムをより深く理解するために、ここから第二の手法をお伝えします。その名も「消去」。そして、ここで重要になる概念が「行動の随伴性」です。（後略）